

# Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に 描かれた二つの地主像

中 村 祥 子

## は じ め に

Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths”（「グリフィス家の制裁」以下 “The Doom” と略記）は、1857年10月26日に書き上げられて、最初アメリカの月刊雑誌 *Harper's New Monthly Magazine* の1858年1月号に掲載され、その後短編小説集 *Round the Sofa*（『ソファを囲んで』）（1859）に再録された。この時期に発表された作品の主なものとしては、1856年に、週刊雑誌 *Household Words*（『身近な話』）のクリスマス向けの号に、3週にわたって短編小説 “The Poor Clare”（「聖クララ会修道女」）が掲載され、次いで1857年4月に、伝記 *The Life of Charlotte Brontë* が出版されているだけである。従って “The Doom” は、一年以上間が空いたあとの、<sup>1</sup> 作者としては久しぶりのフィクションの創作であった。

これはウェールズの地主 Griffiths 家の滅亡を巡る物語である。Griffiths 一族は、14・15世紀に生きていた先祖が犯した罪のために呪いをかけられて、9代目の時に父子の訶争が元で殺人事件が発生し、Griffiths 家は消滅して、今では館は荒廃し、その地所も人手に渡ってしまったということが描かれている。ここにはこの作品を端緒とした Gaskell の後期作品に共通する幾つかのモチーフが見い出せる。先ず中心テーマとしての地主の没落に関わる筋は、このあと *My Lady Ludlow*（『ラドロウ奥様』）（1858），“Crowley Castle”

（「クロウリー城」）（1863）、*Wives and Daughters*（『妻たちと娘たち』）（1864-65）で繰り返し取り上げられることになる。また Griffiths 家の滅亡の背景には一族間に財産を巡る確執があったという問題は“The Half-Brothers”（「異父兄弟」）（1859）で別の角度から再び描かれることになる。また“The Doom”で Griffiths 家の滅亡の直接の切っ掛けになる事件が、純粋な殺人事件ではなくて、偶発的な事故によるものであるという点は、今度はそれが中心テーマとして *A Dark Night's Work*（『或る暗い夜にやった事』）（1863）で扱われている。更に、先祖の犯した罪に対して、その子（又は子孫）にも責任があるのかという問題は“The Sin of a Father”（「父の罪」）（1858）及び *A Dark Night's Work* で取り扱われる。<sup>2</sup> また Griffiths 家の崩壊が呪いのせいであると描かれている点については、超自然現象そのものについての作者の主張を正面に据えて、“Lois the Witch”（「魔女ロイス」）（1859）が描かれることになる。

このように、作者自身は“The Doom”について「物語自体は昔のつまらないもの」（*Letters* L 384）と表現しているが、これは後期作品の嚆矢として示唆に富む作品である。

しかし或る地主一族の没落は、その先祖の悪行に対してかけられた呪いが完結したためであるとする物語は、既に1853年にも書かれている。それは“Morton Hall”（「モートン領主館」）という短編小説である。それは騎士の時代から領主であった Morton 家が、市民革命の直後にかけられた呪いのせいで徐々に没落していき、19世紀に遂に Drumble（これは Manchester の作中名である）の工場主 Carr 家に吸収されて、館は取り壊され、巾広い Carr 通りになってしまったという物語で、“The Doom”とよく似た筋である。Gaskell は何故、同じような経緯で崩壊していく Griffiths 家の物語を、改めてこの時期に書いたのであろうか。

それは一つには、地主の没落という現象を照射する作者の視点が、“Morton Hall”と“The Doom”とでは異なるからである。前作では騎士階級出身の地主の勢力が徐々に衰えていき、代りに市民革命の担い手である新興階級の商工

Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に描かれた二つの地主像

業者たちが台頭してきて、商工業都市 Manchester の郊外にある小さい村に於てさえその地方を支配していく様子が歴史の比較的長いスパンの中で描かれており、これは村の権力者の緩やかな交替劇と見做すことができる。

それに対して “The Doom” は、同じ地主の没落という現象が9代目の時に突然起こると描かれていて、地主一族のいわば内部崩壊に焦点が当てられていると言える。

もう一つの違いは “Morton Hall” では没落していく地主階級に対して作者の同情があり、滅びていく者たちを作者は多分に愛惜の念をもって見ているが、“The Doom” では地主階級の人間を見る作者の目はもっと厳しくリアルであるという点だ。それに近代社会ではどういう地主が没落していき、どういう地主が生き残り繁栄していくかをも区別して描いている。これも地主階級を描く後期作品の作者の特徴の一つである。

更に両作品の違いは、超自然現象の扱い方に認められる。“Morton Hall” では呪いがかけられて予言が実現していくという現象を、作者は小説を興味深くする一手段として、いわば虚心に活用している。しかし “The Doom” では呪いが完結するということ自体の非合理性が問題にされて、一見呪いの完結に見えても、それに対して合理的解釈ができるような根拠を作者は十分に描き込んでいる。作者は “Morton Hall” 後、1856年に既に、超自然現象の存在を否定する複雑な小説 “The Poor Clare” を書き、1859年にはもっと踏み込んで、超自然現象を信じるのがどんなに恐ろしい悲劇をもたらすかという問題を “Lois the Witch” で描くことになる。この中間の1857年に書かれている “The Doom” では、呪いという非合理的なものを、一方では小説を面白くする一要素として利用しつつ、他方ではっきりと現実世界でのその存在を否定しているという点で、この “The Doom” は “The Poor Clare” より遥かにわかりやすいものになっている。それは、“Morton Hall” の頃にはフィクションとしてなら非合理的なものの描写も許されると考えていた作者が、“The Poor Clare” を経て “The Doom” になると大変慎重になっていることの現われである。これも中期作品 “Morton Hall” との大きな相違点なのである。

このように“The Doom”は、地主の没落という後期作品の重要なテーマの一つを中心に据えた現実的な作品である。<sup>3</sup> 従来は作中に言及される呪いや、「息子が父親を殺害する」(230)という事件に焦点を当てて、これは伝説に基づく恐怖小説であると分析されることが多いのだが、以下の小論に於ては、これを後期作品につながるテーマを持ち、幻想を排したりアリスティックな作品であると位置付けて分析していきたい。

## 1. 呪いで予告されること

“The Doom”では先ず最初に、何故 Griffiths 家が呪いをかけられることになったかという短いエピソードが語られる。それは次のようなものである。Rhys ap Gryfydd という Griffiths 家の中世の先祖は、「ウェールズの英雄」(229) Owen Glendower に「兄弟以上に」(230) 信頼され、愛されていたが、Glendower がヘンリー 4 世に反乱を起こしたとき、Rhys ap Gryfydd はイングランド側に通じて Glendower を裏切った。怒った Glendower は（彼は魔術が使えると信じられていたのだが）、捕えた Rhys ap Gryfydd に向かって、「彼とその子孫に刑の宣告を下した」。それは Rhys ap Gryfydd の一族に呪いをかけるという形で宣告された。その呪いとは、“Rhys ap Gryfydd の家の男たちは皆、戦場で非業の死を遂げ、その子孫たちも皆呪われて、どの世代の者も繁栄せずに衰退し、9 代目に至って遂に息子が父を殺すことによって、この一族は消滅するであろう”という予言であった。

Gaskell はここで、Owen Glendower [c.1359-c.1416]（ウェールズ語の綴りでは Owain Glendwr）という中世の実在の豪族が、イングランドに反抗した英雄としてウェールズで大変人気が高いと同時に、彼が今でも、その魔力のせいでウェールズの人々に畏怖されていると強調している。そういう Glendower の呪いは必ず実現するはずであるという一種の保証を与えているのである。そういう意味では Hopkins が言うように「物語の結末は最初からわかっている」(250) ことになる。物語は実際、ほぼこの呪いの通りに展開する。

その上呪いが発せられた原因には、“Morton Hall”のそれよりも説得力がある。“Morton Hall”では呪いは、愛を裏切った夫に対して気が狂った妻がかけたものであって、いわば私怨に端を発した呪いと設定されていた。それに対して、この“The Doom”では、呪いは、ウェールズの独立を志した男を、私利私欲のために裏切ったことへの復讐という形で表現されていて、それだけ呪いの背景に社会的広がりを与えられていると同時に、呪われた男の卑怯さが強調されることになる。Gaskellは“An Accursed Race”（「呪われた民族」）（1855）という作品<sup>5</sup>でも、信頼関係にあった相手を裏切る行為自体がどれだけ卑劣なものであるかに触れている。つまり“The Doom”では、“The Poor Clare”に描かれている呪い（それは、娘を誘惑し私生子を生ませて自殺させた男に対する呪いである）と同じく、呪われた側には情状酌量の余地は一切無く、そういう一族は呪われて当然だとされている。

しかし、「『古くからの親友』であり、身内の者であり、兄弟以上の者」（230）が、私利私欲のためにその信頼や友情を裏切るという行為は、中世でこそ卑怯だと見做され、「嫌悪や軽蔑の的」になり得ても、近代社会に於ては必ずしも事情は同じではない。近代社会は個人の能力や実力や才覚によって権力や富を得ることが可能になった社会であるが、そうした社会になれば、友情や信頼を裏切ったり、「兄弟の血を流し」「カインの印を付けた」者が、権力を握り繁栄していくというのが現実である。<sup>6</sup>

地主階級の人間に限って言っても、中世なら卑怯とされた Rhys ap Gryfydd 的な行為のできる者は、消滅するどころか逆に繁栄していくのである。そういう行為ができる者しか繁栄できないとも言える。Gaskellは“The Doom”を書いた直後に *My Lady Ludlow* を書いているが、そこでは封建的“美德”を捨てることができず、封建時代の領主の価値観で領地を所有していこうとした19世紀の地主が、結局衰退して、彼女の地所がパン製造業者から身を起こした商工業者に浸蝕されていく物語が描かれる。この地主 Lady Ludlow は、ちょうど Rhys ap Gryfydd 的生き方とは正反対の生き方をしているわけである。だから近代社会になっても Rhys ap Gryfydd 的生き方ので

きない地主 Lady Ludlow は、Rhys ap Gryfydd 的生き方をする商人階級に負けていくのである。

Gaskell は彼女の最後の小説 *Wives and Daughters* では、この問題を対照的な二つのタイプの地主として描き分けている。つまり Rhys ap Gryfydd 的生き方のできる大地主 Cumnor 家と、できない古い地主 Hamley 家である。

従って中世に於ける Rhys ap Gryfydd の行為は、後の近代に於ける有力な地主 Cumnor 家のやり方に通じるものであり、近代社会で繁栄するはずの地主の生き方の先取りである。だから Rhys ap Gryfydd の子孫は、もしこの先祖の生き方を踏襲していれば、中世の間こそ「兄弟の血を流そうとした奴が行くぞ」(230) と軽蔑され嫌悪されるかもしれないが、財力や才覚が物を言う近代に入れば、消滅どころか逆に勢力を拡張していくはずなのである。

作中ではこの呪いについてのエピソードのあと、8代目までの物語が簡潔に述べられるが、実際、そこでは世代が進む程、つまり時代が近代に入っていく程、呪いの効力が薄れていったと描かれている。たとえば Owen Glendower の予言では、

「どの世代の者も、彼らの地所が雪のように解け去るのを見るであろう。そうだ、彼らが財宝を蓄積しようと日夜苦闘しても、彼らの富は消え去るであろう。」(230)

とされていたが、「長い年月が、呪い全体の奇跡を喚起させる力をほとんど死滅させてしまった」。そして「何か困った出来事が Griffiths 家の人々に起った時に」その説明としてこの昔の呪いが持ち出される程度のもに後退してしまっていた。

更に「8代目の時には、予言への信頼の念は破壊されたも同然で」(230-31)、むしろ、予言は「逆転するように見えた」(231) ののである。つまり8代目の当主は金持の女相続人である女性と結婚し、彼女の「相続財産」によって「Griffiths 家の先祖伝来の地所」を増大させ、Bodowen の館も手に入れたのである。この8代目の男は己の損得を抜け目なく計算した Rhys ap

Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に描かれた二つの地主像

Gryfydd のまさに子孫に相応しく行動したのである。

こうした「呪いの力……の死滅」(230) や「休眠」(231) 「逆転」は、近代社会に於て繁栄しうる地主の手口の一つ（たとえば豊かな地主の娘と結婚するというような）をリアルに例示していると同時に、作中での効果としては、予言の実現という超自然現象を否定する要素としても使われていることがわかる。

では物語の最後に 9 代目の男に関する予言が実現したように思える点はどう考えられるか。作中では予言通り、9 代目の地主は 10 代目になるはずの息子に「殺されて」(266)、息子は嵐の海に消えて「人々の目に二度と見られることは無かった」(269)。これは Owen Glendower が、

「9 世代がこの地表から消え去った時、お前の血はどんな人間の静脈にももはや流れることはないだろう。その時にお前の家系の最後の男が私のあだを討つだろう。息子が父親を殺害するであろう。」(230)

と予言した通りになったのである。

しかしここでも作者は、後に詳しく見るように、呪いが文字通り完結したとは描いていない。先ず 9 代目の地主の死亡事件は「事故」(267) であったと強調されている。更に息子が嵐の海に消えてしまう場面は、“Lois the Witch” の Manasseh が森の奥深く消えて、「キリスト教徒たちの目に二度と見られることは無かった」(190) という表現と同じで、実際に嵐の海に飲み込まれて死んでしまったとも解釈できるが、息子が一人で嵐の海に船で乗り出したのではなく、その妻と、漁師である妻の父親と共に去ったとされていることによって、別の解釈が可能である（この点についても後述）。

いずれにせよこの呪いのエピソードで重要なことは、その超自然な雰囲気にあるのではなく、Rhys ap Gryfydd の時代から見て 9 代目で、地主の Griffiths 家が突然消滅するということが冒頭で予告されているという点である。

何故 9 代目に異変が起こるとされているのか。Rhys ap Gryfydd から 9 代

目とはいつか。勿論9代という数字自体に意味はない。作中でもいつ予言が実現するのかは、実はそんなに厳密ではない。たとえば呪いは「チューダー朝時代から」(265) 決まっていたことと表現されたり(チューダー朝はヘンリー7世の時代から始まるから、ヘンリー4世時代のOwen Glendowerの呪いとは時代が合わない)、「この100年かそれ以上の間」(263) そうなるように決められてきたことと書かれている(9代だから実際には300年弱位か)。従って、9代目とは、作者の意図では彼女がウェールズで聞いた伝説<sup>7</sup>の「呪われた家」(267)が、実際に没落した時期を指しているのであろうが、客観的には、*Wives and Daughters*の時代背景と同じく、作者にとっての現代つまり19世紀半ばを意味する。要するに9代目とは封建時代が終って完全に近代社会になっている時期ということを示す。それは先に見たようにまさにRhys ap Gryfyddの生き方が堂々と世に蔓延る時代である。そうした時期にはRhys ap Gryfyddの生き方のできる地主なら生き残れるが、そうでなければたとえ中世の時代に名門の家柄でも没落していかざるを得ない。

従って“The Doom”は、時代を先取りした先祖Rhys ap Gryfyddの処生術に倣って近代社会を無事8代目まで乗り切ってきた地主のGriffiths家が、本来なら没落するはずがないのに、突然消滅してしまう物語だと言えることができる。

## II. 対照的な父と子

“The Doom”は冒頭の呪いに関わるエピソードと8代目までの短い記述のあと、本来の物語が始まる。それは9代目の地主Robert Griffithsとその息子Owen Griffithsとの二世代の物語である。この二人は単に親子であるというだけでなく、Owenが13~14歳になるまでは、彼は秘蔵っ子として「父の唯一の愛情の対象であり最愛の者」(240)である。それなのにOwenが25~26歳になった時、彼が父の死の原因となって「予言が成就する」(250)。そのために二人の真の関係がわかりにくい、客観的に見れば、この二人は大変対照的な二つのタイプの地主像を表わしているのである。つまりRhys ap



Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に描かれた二つの地主像

Gryfydd 的生き方をする地主 Robert と、それができない「地主の後継者」(239) Owen とである。作者はこの父子を、次のように様々な角度から、はっきりと対照的に描き分けている。

### (1) 生きる姿勢の対照性

まず生き方の点で、二人は大変対照的である。父の Robert はもともと 8 代目の地主の次男であった。8 代目の男は先に触れたようにしっかり Rhys ap Gryfydd 的生き方のできる男であったが、そういう男の家庭で、Robert はあくまで次男としての扱いか受けなくて育った。兄である長男の Llewellyn が「将来の地主」(232) として「周りの皆んなに一貫して甘やかされて」育ったのに対して、次男の Robert は「やりたい事が妨げられるのと甘やかされるのと半々だった」。つまり Robert は「将来は自分でパンを稼がねばならない」ということを子供時代から意識に植え付けられて育ったのである。

彼は「初めは牧師になる運命であった」。それで彼は Oxford 大学に入り、曲りなりにも勉強をしていたが、「彼には幸運にも」、兄の Llewellyn が「深酒から来る病に短期間伏せた後で」死んでしまった。Robert は「も早『学問でパンを稼ぐ』必要が無くなった今となっては全く当然のことと思えたが、Oxford へは戻らずに」、Griffiths 家の領主館 Bodowen で父の「後継者」として暮し、間も無く父が亡くなったので、9 代目の地主になったのだった。

このように Robert は思いがけない幸運から地主になったのだが、兄の死後、父親もすぐに亡くなるので、「地主の後継者」という中途半端な期間も、彼にはまた短かった。従って生活習慣の点でも、兄が、生れた時から地主の後継ぎとして長い間無為に日々を送るしか無くて結局酒浸りの無能者になってしまったのとは大いに異っている。Robert は地主になったあとも「決して大酒は飲まなかった。……Robert Griffiths はいつもしらふであった」(232)。

彼は生活を豊かにする趣味も持っていた。特に

彼の文学趣味はウェールズのあらゆる種類の古物を収集することに発揮された。

ウェールズの古写本の彼の集積は、Dr. Pugh でさえ羨んだことだろう……。 (232)

Dr. Pugh とは「著名なウェールズの学者で古物研究者」(notes 450) の William Owen Pughe (1789-1835) のことである。作者はここで、Robert の古物収集が、単なる趣味の域を越えて、専門家として充分やっつけていける程であったと言っている。だから Robert は、もし地主になれなくても、牧師になるか又は学者の道に進んで、自分の能力を生かして生きていけるような、強い生活力のある男だったのである。

彼のこの側面は、後に *Wives and Daughters* に登場する地主 Hamley 家の次男 Roger の生き方に一部引き継がれている。Roger Hamley は地主の地位を亡兄の遺児に譲って、自らは博物学者になって「学問でパンを稼ぐ」ことになっている（この二人の地主の次男が、Robert と Roger として、頭文字が同じである点は注目に値する）。

一方息子の Owen Griffiths は全く事情が異なる。彼は長男であり、生まれた時から「地主の後継者」である。しかも彼の誕生は Bodowen の館で長い間待ち望まれたものだった。両親には初め娘が生まれて、そのあと「Bodowen の家庭では……もう揺り籠は二度と揺れることはなかりうと思われた頃に、Mrs. Griffiths は後継者である息子を生んだのだった」(233)。

従って Owen は生まれた瞬間から「家の王であった」(234)。「召し使いや従者たちにとって、彼の意志は法律であった」(239)。彼が生まれて間もなく母親が亡くなったため、父親からは一層溺愛され、「甘やかされた」(234)。しかも彼は一人っ子というのではなく、5～6歳年上の姉が居て、「姉の Augarad はほとんど無視されていた」から、一層 Owen は家での優位な扱いというものを認識できる立場でもあった。

しかしこういう状態の Owen の人生に激変が起る。Owen が学校に行っていた15・16歳の頃、父が再婚したのである。そして「再婚した妻が、地主にとって最愛の者となった」(237)。しかもこの継母は、先夫との間の幼い息

子 (Robert) を連れて来ていた。従って Owen にとって父の再婚は、継母とその連れ子に父の愛を奪われたという感情的なものを意味するだけではなく、もっと実質的な危険を伴うものであった。父の愛が、再婚した妻の巧妙な策略で、この幼い Robert に移ってしまっ、将来は当然地主になるはずの Owen の地位が危なくなってきたからである。

勿論、父の Robert は理性的にはまだ Owen を自分の後継ぎだと思っている。しかし今では父子の間には徹底した「仲違い」(239)があり、それは、「たとえ表立っては認められていなくても今や Bodowen での最高権威として君臨する」(258) 新しい Mrs. Griffiths の巧みな誘導で、父子の亀裂として益々大きくなってきている。近い将来、父が子を「家から追い出し」(256)、父は「ただ、彼の妻に満足し、その連れ子を不思議にも溺愛するという、毎日の幸せへの障害が、遂に取り除かれたと感じるだけ」の日が来るかもしれない。つまり、Robert が Owen を勘当し、妻の連れ子の Robert を自分の後継ぎにする日が来る可能性は皆無ではない。むしろそうなる危険性が高い。父は既に Owen に向って、「もしお前が私の息子と呼ばれたいなら」(253) という文句を Owen に対する脅迫として使っている。これは自分に刃向えば、いつ Owen を息子と呼ばなくなるかもしれない(勘当するかもしれない)という脅しである。父の Robert は、自分自身が、本来地主になるはずが無かったのに、幸運な事情からなったのだから、自分の後継者たちにも同じような (Owen にとっては逆の方向の) 事情が生じても気にしないであろう。従って、一層そうなる危険性がある。

しかし Owen はこうした不安定な立場に置かれ、日々の平穩も見い出せなくなっても、Bodowen を捨てようとしない。「彼は毎日の屈辱に満ちた場所や生活様式を捨て去ろうとすぐに決めるだけの十分な心の強さを持っていなかった」(239)。彼は学生時代には「学問の或る分野に於て」(236) 頭角を顕わすだけの才能があったのにそれを追求することもせず、大学を卒業して家に帰って来たあとは、広い領地で朝から晩まで猟をしたり魚を獲って無為に過ごし、疲れると「『怠惰な休息に手足を延ばして』」休み、「自分は父の

家ではゼロに等しい」(239)と嘆くだけである。生まれた時から「BodowenのGriffiths若様」(244)であるOwenには、「後継ぎとして、何の物質的必要性を満たす努力もする必要がない」(239)生活、つまり「怠惰で目的のない生活を送る」以外に選択肢が無いのである。つまり「地主の後継者」という足場を外されたら、彼はどう生きてたらいかわからないのである。その点ではOwenは、「将来の地主」の地位を約束されて酒浸りの生活を送り若くして死んだ伯父Llewellynの性格を一部引き継いでいる。

こうして父の後を継いで地主になる生き方以外考えることのできないOwenは、父のRobertと違って、地主になるしか能が無い男であると言える。

もっともこのことがOwenにとって悲劇であるのは、時代が近代だからである。封建時代なら領主の長男Owenは、どんなに無能でも次期の領主になれたらろう。が近代社会では、地主の財産を巡って新しいMrs. Griffithsの策略が入り込む余地がある。「ひとたび黄金が目的となれば、たちまち父子骨肉の間も、背いて行く」<sup>めあて</sup>のである。従ってOwenにとっては、Griffiths家の財産について揉め事が起る前に自分が地主にならねばならない。これは客観的に見れば、父が一日も早く死んでくれて自分が地主になれる日を、待ち望んでいるということである。その意味ではOwenは、父親を殺して世代交替をするという「*Œdipus Tyrannus*の悲劇」(241)に「余りにもよく似た予言」(「息子が父親を殺害するであろう」(230)という予言)を、Owen Glendowerに与えられたということになる。作者は、近代社会に於て地主の後継者に必然的に課せられてくるこの残酷な立場をも、Owenの「宿命」(doom)(265)という語で表現していると言える。

しかし封建時代と違って近代社会で地主になるということは、一方で、効率性が追求される社会を地主として生き残っていくということでもある。それは具体的には、財産を抜け目なく投資したり、とりわけ借地人たちにとっては苛酷な地主になるということである。つまりRhys ap Gryfyddの生き方を貫徹することである。自分にお膳立てされてきた地主になる道しか考える

ことのできない守旧のタイプの Owen には、こうした価値観への自らの意識の変革は恐らくできないであろう。作中では Owen は父の Robert よりも、召し使いたちや借地人たちに人気があるように描かれている。Owen は Robert と違って彼らに物分りが良く、とても苛酷な地主になることはできそうもない。つまり彼は地主になるしか能がないのだが、他方で彼は、近代社会に於ては地主としては生き残れない、地主失格者でもあるのだ。従って Griffiths 家は、いずれにせよこの Owen の時代で没落してしまうことになる。

作者はこの問題を *Wives and Daughters* ではより深く考察している。ここでは Owen の生き方は、地主 Hamley 家の長男 Osborne の生き方に引き継がれている（ここでも作者がこの二人の地主の長男を、Owen, Osborne と頭文字を同じにしていることは注目に値する）。Osborne も、生れた時から地主になる道を約束されて、また地主になるしか能の無い男である。が一方で、地主になる者には地方都市に於てさえ意識の変革が求められる時代であるが、そういう時期に詩人になるのが夢である Osborne には、新しい近代的な地主になる（＝借地人にとっては苛酷な地主になる）こともまた不可能であると予想される。その意味では Osborne は誠実で心優しい若者なのである。彼は結局、地主になる前に、父より先に若くして病死することになっている。

このように作者は “The Doom” で対照的な生き方をする地主父子 Robert と Owen を、*Wives and Daughters* では同じ世代の兄弟（長男 Osborne と次男 Roger）として設定し、近代社会で地主であることの意味を改めて考えようとしていると言える。

## （２）結婚問題で見せる二人の対照性

父の Robert と息子の Owen は、こうした基本的な生きる姿勢に於て対照的であるだけでなく、人生で出会う具体的な出来事でも対照的に行動する。たとえば結婚問題でも Robert は着実に前もって計算した道を選ぶ。つまり自分が地主になったあとで、25歳の頃に、自分の地所の土地差配人で、「抜け目がなく賢明なウェールズの attorney」（233）（従って十分に経済力のある男）の一人娘と結婚する。そしてこの妻が亡くなって、姉娘が結婚し、跡

取りの息子 Owen も寄宿学校に入ったあとは、単にこの息子 Owen の成長にのみ夢を託すのではなく、あくまで自分自身の幸福を追求し、まだ若くて美しい未亡人と再婚している。「地主 Griffiths は自分本位な親だった」(236)。つまり Robert は近代的な個人主義を貫く人物なのである。

作者は Robert のような社会的に出世していく人物の結婚のパターンを、*A Dark Night's Work* でも、Ralph Corbet という男にさせている。この Ralph は、やはり地主の次男で野心家で、金持ちの attorney の一人娘と婚約し（但し或る事件で破談になり、結局別の権力者の姪と結婚するが）、若くして判事に出世する人物である。ここでもそういう生き方をする地主の次男が Ralph と R の頭文字を付けられているのは偶然ではない。作者は Ralph を Robert のように近代的自我に充分目覚めた男、むしろ利己主義の男として描いているのがわかる。

再婚に関しても、Robert のような立場の男が再婚する場合は、子供を連れて女性が生活のためにやむを得ず再婚する（“The Half-Brothers”の Helen のように）のとは違う点を、作者は強調している。つまりそれは彼の利己主義からである。とは言っても、それが個人の幸福を追求する、近代的な新しい個人主義的要求であることに変りはない。

一方息子の Owen は (*Wives and Daughters* の Osborne と同様に)、生活力が無いのに24~25歳の頃に秘密の結婚をする。しかも相手は Ellis Pritchard という「Bodowen の地所の借地人」(248)で「半ば農夫で半ば漁師」(245)の一人娘の Nest という女性である。従ってこれは「身分違いの結婚」(249)である。Pritchard 父娘は、Owen が「Bodowen の若き地主」であるという「優れた立場に気付かないわけではなく」、Nest が将来「ウェールズの領主館に奥方として移される」という利点を充分認識している。一方の Owen は、Nest が「明らかに村一番の美人」(243)であり、「彼が可能と思ったよりも彼女は機知があり才がある」(244)点にひかれ、彼女は浮気者だという噂も無視して結婚する。従ってこの「身分違いの結婚」は、Nest の個人的魅力以外、世俗的には Owen の側に得るものは無い。彼の結婚は父の Robert の

Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に描かれた二つの地主像

場合と違って、全く打算が無いものである。

勿論、作者はこのような「身分違いの結婚」や相手の選択そのものを批判しているのではない。何故なら Nest は結婚後、噂を吹き飛ばすような愛情深い女性に変身し、Bodowen の館で不幸な Owen に「今という瞬間以外のすべてを忘れ」(250) させてくれる、真の魅力を持つ女性と描かれているからである。しかも Owen の Nest との結婚は、作中で Owen が唯一主体的に行動するもので、その方向には、彼が地主以外で生きる可能性が僅かながら示唆されていると言える。作者がこの Owen と Nest との「身分違いの結婚」を、恋愛の自由を貫く新しい価値観のものとして肯定的に描いていることは、*Wives and Daughters* の同じようなパターンの Osborne と Aimée との結婚の肯定的な描き方によっても追認できる。

従って “The Doom” で作者が Owen の結婚に関して問題にしているのは、地主の後継者というだけの不安定な保証で、生活力も無いのに結婚してしまう、Owen の無謀さや無計画性である。Owen は正式に結婚しても（少なくとも Owen は Nest と正式に結婚するという誠実さは持っている）、妻子を養う経済力は一切無いので、彼らの生活は妻の父 Ellis に全面的に依存している。Nest が父親と住む Ty Glas に、Owen が Bodowen から頻繁に通って来るという形で、彼らの結婚生活は維持されているのだ。Ellis は「彼の小さい Nest が将来の Bodowen の奥様になる」(249) ことで甘んじてこの状況を受け入れてはいる。しかし Ellis の思わくはともかくとして、この結婚は異常であり、Owen の無責任さは明白だ。

Owen は Nest との間に子供（小さい Owen）が生まれても、そうした生活形態を変えようとししない。村人たちが（地主の Robert 以外）誰一人、「地主の後継ぎと Nest Prichard 及び彼女の子供との関係を知らない者は居ない」(257) ようになっても、Owen はこの状況を変えるための何の行動も起こさない。ただ父との冷たい関係が修復されることをひたすら願っているだけである。

この時、夫の Robert 以上に計算高い継母の Mrs. Griffiths が、夫の Robert

に Owen のこの秘密の結婚を暴露し、しかも Nest を「売春婦である」(252) と嘘の情報を交えて伝え、地主を激怒させる。彼女は、あわよくばこの機会に一気に、Owen を Bodowen から追い出して自分の子供の Robert を後継者に着けようとするのだが、こうした策動者の、いわばクーデターの状況が転覆される動きが起こらなければ、恐らく Owen は自分からは、自分たちの結婚の将来を真剣に考えることはなかつたろう。このように自分から主体的に行動を起こすことは一切せずにひたすら事態の推移が自分に都合良く行ってくれることを願うだけの Owen は、全く受身の人間で、いくら Owen 自身は父を愛していると自覚していても、父には彼はただ「父の死」を待っていると誤解されることになるのである。

### (3) 刑事事件に対する態度の対照性

父と子の対照性は、“我が子”を殺傷された時にとる二人の態度の違いを通して示されている。この事件は先ず Owen に関して先に起こる。Owen が秘密に売春婦の Nest と結婚していた、と思込まされた父の Robert は、Ty Glas へ Owen を追跡し、Owen の抱いている子供を「他人の子」(252) と思って取り上げ、Nest に投げ返し、Ty Glas をあとにする。その時余りに乱暴にそうしたため、その子供は家具の角に頭をぶつけて死んでしまう。

こうして我が子を殺されてしまった時でも、Owen は父に対する怒りを押さえ、復讐心を押さえ、池の側へさ迷って行き、一人嘆き悲しむだけである。彼は先ず自分の感情を制御するという行動をとっている。そして「彼の父は、子供に起きたあの致命的な事故に気付く前に小屋を出ていた」(255)、従って父は小さい Owen が死んだのを知らないのだと考えつき、父には何も言わずに Nest とこの地を離れようと決意する。

しかし父の Robert は、幼児に暴力を振ったことで、傷害致死の責任は当然問われなければならない。Owen は父親に彼の行為の責任をもっと追及しても良いはずだ。

それに対して、妻の連れ子で今では Robert のお気に入りの子供に起こるよく似た事件に対する Robert の対応はもっと現実的である。Owen は、父



に我が子を殺されたあと、遂に「父の元を永久に去ろうと決意をし」(255)、所持金を取りに Bodowen に戻った。が、そこで義弟の Robert に見つかって、Nest の悪口を浴びせられた。そのため Owen は思わず「Robert を激しく殴ってしまった」(257)。「少年は半ばぼうっとし、半ばおびえて」、倒れたまま賢く「気を失ったふりをした」。すぐに自制した Owen が少年を介抱している所へ地主が通りかかり、「一瞬後、地主は彼の小さいお気に入りの子の、見たところ命が無いように思える身体を目にした」(258)。とたんに地主は召し使いたちを呼んで Owen を拘束し、「少年 Robert の傷の実際の程度について、外科医の意見が知らされるまで」(259)、Owen を頑丈な部屋に監禁した。

地主 Robert と同じ名前を持つ、Mrs. Griffiths の連れ子の Robert は、母親が再婚した時 3 歳位とされているので、この時 10 歳位である。元々彼は「妖精の取り替えっ子」(238)と言われるような「いたずら者で、……人を苦しめることに悪意ある喜びを持つ」残酷な子供であったが、それが母親の策略で今やすっかり地主の寵愛を得て、Bodowen で好きなように振る舞っている。この時 Owen が義弟 Robert を殴りつけたのも、最初は Robert の悪意ある挑発が原因である。従ってこの事件は Owen の方に多分に情状酌量の余地がある。その上少年は被害を誇張して訴えているのである。それでも地主は「この暴力は前もって計画された行為だ」(258)と決めつけ、Owen を悪質な暴力事件の「犯人」として厳しく扱っている。暴力事件に対して地主の方が、若いしかも被害の大きい Owen よりも、近代の法治社会らしく行動しているのである。

ちなみに Owen が義弟を殴ったこの事件が直接のきっかけになって Owen が監禁され、こっそり逃げた Owen と、彼を見つけた地主との間で無人の場で取っ組み合いが起り、地主の死へと発展することになる。作者はここで、Robert のような子供のずるさや残酷さを描き、子供でも充分悲劇の原因になり得ると描いている。これは後に “Lois the Witch” で、やはり 9 歳から 11 歳位の Prudence という少女の残酷な行動を通して描かれる問題である。

#### (4) 呪いに対する意識の対照性

地主と Owen との相違は、自分たち一族にかけられている呪いに対する二人の姿勢にも認められる。二人共勿論、自分たちの世代で呪いが完結することになっているのを知っている。

Robert に関してはこの予言は次のように描かれている。

地主 Griffiths は、彼の世代で完了されることになっている予言のことを知らないわけではなかった。彼は時々、彼の友だちの間に居る時、それに言及したものだった、信用していないことを示す不謹慎さで。(234)

また「地主 Griffiths はその伝説を、半ばふざけて小さい息子に語った」(235)。つまり Robert は合理主義者として、こうした予言の実現に懐疑的なのである。

何より彼が予言を気にしていないことを示す現象は、彼が自分の息子を Owen と名付けていることである。伝説では、Owen Glendower は呪いの言葉が発した時、9代目の男がその息子に殺されるだろうと予言したが、更に「その時お前の家系の最後の男が私のあだを討つだろう」(230)と言ったことになっている。この意味は、9代目の地主の息子、本来なら10代目になるはずの男（「彼の家系の最後の男」）が、Owen Glendower の身代りになって、あだを討つということである。もしこの予言を信じていたら、Robert は息子に Owen Glendower を連想させるような名前をわざわざ付けることはしないであろう。しかし Robert はウェールズ地方に多い Owen 名を息子に付けて、Owen Griffiths としている。<sup>10</sup>

最後に父子が海岸の足場の不安定な、絶壁の上と言ってもよいような所で取っ組み合う場面についても同様のことが言える。Robert は予言では自分が Owen に殺されることになっているのだから、もしそれを信じていたら、このように危険な、しかも近くに誰も居ない場所で、無防備に、わざわざ自分の方から Owen に近づくことはしないはずである。

この点で Robert は、現実主義者の Ellis Pritchard と考え方が似ている。

Ellis も「予言についての古い物語を知っていた。……しかしどういうわけか、それが自分の時代に起こるだろうとは決して考えていなかった」(263)。そして実際にその予言の完了を思わせるような事件が起きた時、Ellis は、それが予言の完結というより、Robert が Owen と Nest との間の子供を殺したことに対する「正しい罰」であると考え、事件そのものの性質については「それは結局、事故に過ぎなかったのだ！」(267) と断言している。

それに対して Owen は、父が死亡した時の状況に於て、彼が一方の当事者であって真相を一番良く知っており、従ってそれが予言とは違って純然たる事故であるとよくわかっているはずである。監禁された部屋から逃げた Owen を見つけた父が、Owen の後ろにこっそり近付き、突然 Owen に掴みかかるのだが、Owen は誰に襲われたのか気付く前に咄嗟に、攻撃を避けるために父を突き離す。その一突きが父を海に転落させ、父はその時ボートの角に頭を強くぶつけて即死したのだった。客観的に見れば、これは Owen が自己防衛のためにとった行動によって起った不幸な事故であったと言える。

Gaskell は *North and South* (『北と南』) (1855) でも同じような経緯で起こる死亡事件を描いている。そこでも、ヒロインの兄 Frederick は、元の海軍仲間の Leonards から逃げるため彼を突き離すが、この一突きが彼を死亡させてしまう。しかし作者は Frederick にこの事件に対して殺人の罪があるとは決して認めていない。結果的に相手を死亡させた責任は問うているが<sup>11</sup> 従って “The Doom” でも Owen は正当防衛の結果、不幸な死亡事故を起こした者という認識が妥当なところである。

しかし Owen は「[Griffiths 家に下された] 畏ろしい罪の宣告 (doom) が今もなお忘れられていないように思えるということのほかは何もわからなかった」(261)。そして「それは私のしたことではなかった。そうすることが私の宿命 (doom) だった」(265)、「私は私の家系の最後の男だ。そして息子がその父親を殺害したのだ！」(267) と自分を追い込んでいく。ここでも Owen は、物事の合理的判断ができない、暗示にかかりやすい性格であることを示している。

### III. 二つの価値観

このように9代目の地主 Robert は、合理的な思考と徹底した個人主義を貫く、新しい意識の持ち主であり、一方 Owen は、旧弊な意識の、しかし誠実で他人の苦しみを直視できないタイプの人間である。Robert は Griffiths 家の中世の先祖 Rhys ap Gryfydd のまさに直系の子孫と言え、Robert の頭文字 R. G. が、Rhys ap Gryfrdd と同じであることは、二人の同一性を象徴的に示している。それに対して Owen の方は、これも頭文字 O. G. が同じである Owen Glendower の、近代社会での代行者である。中世に於て二人の領主 Rhys ap Gryfydd と Owen Glendower の間で価値観が対立したように、近代社会に於て改めて二つの価値観が、Robert と Owen という父子の間で対立したのである。中世では Owen 的価値観が勝って、Rhys ap Gryfydd 的 (Robert 的) 価値観は恥ずかしいものとされた。しかし近代社会では逆に、Robert 的価値観が蔓延り、その価値観の持ち主が繁栄するのである。

地主一族の Griffiths 家としても、Robert はちゃっかりと9代目の地主になり、地主としての人生を満喫するが (もっとも事件でそれが中断するけれども)、一方の Owen は仮にこの事件が起こらなくても恐らく地主にはなれないだろう。いずれ近いうちに Owen は勘当されて Bodowen の館を追い出され、義弟の Robert が Griffiths 家の跡を継いでいくはずだから。万一 Owen が10代目の地主になれたとしても、先に見たように、彼は近代社会では繁栄する地主には決してなり得ない地主失格者であるから、Griffiths 家はすぐに没落、消滅するはずである。そういう意味で、地主の地位に関して言えば、“The Doom” は息子が父を殺すのではなく、息子 (の価値観) が父 (の価値観) に負ける物語であると言える。

作者は Robert の価値観の、近代社会での勝利を、最後にも象徴的に次のように示している。父の Robert が死んだ後、Owen は、先に父に殺された我が子と一緒に、父を密かに埋葬するつもりだった。そうすることで彼は父と「いわば或る種の和解をしようと望んでいた」(268)。ところが父の方は

あくまでこの「和解」を拒否する。嵐の波が、父の亡骸を帆布で包んでボートの底に横たえておいた、そのボートのとも綱を解いてしまい、父の遺体がボートごと消えてしまったのだ。つまり「父は死んでさえも、どんなそういう平穏な結び付きにも刃向っているかのように思えた」(269)。これは Robert が、死んだ後も、Owen に負けていないということを示している。

この現象は、事件を最初に知らされた Ellis が考えたように、現実的なレベルに於ても Owen にとっては危険だ。「もし地主の死体が、彼の息子のものと知られているボートで漂流しているのが発見されたら、彼の死に方について恐ろしい疑惑を生じさせるだろう」。そして Owen は、父親殺害の容疑で逮捕されるであろう。実際には事故死なのだから Owen には殺人の罪は無いのだが、「しかし法はそれをそのように [Owen の子を殺した当然の罰として起った事故だとは] 見做さないだろう。……当時の緩いウェールズの法でさえ、地主 Griffiths 程の地位にある男の死の調査をしないはずはあり得なかった」(264)。

Owen が Robert の遺体を密かに埋葬できていたら (これは Ellis の親戚が牧師を務める教会が少し離れた島にあったので、実現する可能性が高かった)、或いは「いわゆる水夫の墓地に埋葬する [水葬を施す]」(269) ことができたら、Ellis が考えたように、Owen は何年か後に戻って来て「Bodowen の相続を確実なものにする」ことができたかもしれない。勿論 Owen は「私は二度と家に戻って来る積りは無い。この場所は呪われている」(267) と断言し、父の死の直後から、父の跡を継いで地主になる道は完全に放棄している。しかしいずれにせよ Robert が、死後も、Owen が10代目の地主になる事を阻んでいるのだと言うことができる。

Gaskell はこのように、Robert 的 (=Rhys ap Gryfydd 的) 価値観の持ち主でなければ、地主として最終的に勝ち残れないと描いている。だから Owen が Rhys ap Gryfydd 的生き方ができない以上は、Griffiths 家は地主としては9代目で消滅せざるを得ないのである。

では何故、作者は、二つの価値観の持ち主のうち、Robertの方が現実

生き残るというようにしていないのか。つまり Robert のような地主として堅実なタイプの者を、世代的には古い方に設定しているのは何故か。父と子とが取っ組み合うことになれば、幾ら価値観に於て近代的であっても、肉体的には若い Owen の力の方が強くて、Robert が負けることになるのは明らかなのだから。

それは作者が、地主としての Robert 的生き方を肯定していないからである。確かに近代社会で地主として生き残り、勢力を維持していくためには、Robert のような地主でないといけませんが、そういう地主は生活のすべての分野で合理的思考を貫き、自己中心の生き方をして抜け目なく生きていける人物であるということになる。地主である以上、地所の管理に於てこの生き方を貫くということである。それは少しでも収益を高めるためのあらゆる努力をし、借地人からは容赦なく地代を取り立てる苛酷な地主であるということである。

こうした近代社会で繁栄する地主階級の人間の持つ冷酷さや残酷さは、作中では、地主 Robert が Ty Glas に乗り込んで、Owen たち親子が和やかに歓談しているところをたちまち打ち壊す場面で最もよく示されている。Robert は自分の怒りから事情をよく確かめもせず、怯えて身動きをすることもできないでいる Nest を売春婦呼ばわりした揚句、驚いて何事が起ったのかも理解していない「小さい Owen」（253）を乱暴に「Owen の腕から引っ手繰り……その子を母親に投げつける」。

無力な幼児を「引っ手繰り……投げつける」というような酷い行為は、たとえ Robert が、「その子は戸棚の鋭い角にぶつかって落ち、石の床に墜落した」のを見届けたわけではなかったとしても、人の好い Owen が考えるような、知らずにしたこととして済ませられるものではないであろう。そうした行為の残酷さを、作者は幼児の死を通して、また突然「貴重な赤ん坊」（253）を奪われた Nest の嘆きの深さを通して示している。

現実の社会で地主として繁栄していくのは、確かにこうした残酷な行為をなし得る Robert 的人物たちである。がそうした残酷さは許されるものでは

ないと作者は言おうとしているのである。

その上、そういう地主はしばしば、自ら招いて Griffiths 家のように財産を巡る醜い陰謀を家庭内に持ち込み、家庭に不穏や争いごとを引き起こし、肉身の自然な愛情を損わせていく。まさに「父子骨肉の間」の争いになる。そして結局、一族間の財産や後継者争いから内部分裂して、一族そのものが崩壊していくのである。作者は、Robert 的価値観はそうした地主一族の自滅につながることもあり得ると批判している。

同じことは Robert 的生き方の女性版を示す Mrs. Griffiths の扱いについても言える。現実の社会では彼女のように策略を用いても我が子に有利に地主の財産が遺されるよう抜け目なく立ち回る者が、世俗的には勝ち残っていくだろう。作中でも Mrs. Griffiths は着々と実の父子の間を離反させ、Owen が Bodowen を出ていくか父が Owen を追い出すかする方向に持っていく。しかし作品の最後に於て、作者はこの「Mrs. Griffiths 自身の計画」(240) は決して成功しなかったと描いている。彼女の連れ子を後継者にする前に、夫の Robert は亡くなってしまうからである。最後に見せる彼女の「恐怖」(268) は、「地主が行方不明になっている」ことに対するものだけではなく、「計画」が完遂する前に彼が「行方不明」になったことに対するものである。そして Bodowen の館は荒廃し、地所は「サクソン人の余所者」(269) の手に渡ってしまっている。ここでも作者が、一方で現実社会の有様をリアルに描きつつ、そうした現状をそのまま承認したくないとする意図を持つことが見てとれる。

作者が Robert 的地主を批判している箇所は他にもある。その一つは、Robert が「小さい Owen」を死なせてしまう事件の描き方である。この事件は先に見たように Robert の残酷さを示しているが、Robert はこの時、「小さい Owen」が Owen の本当の子供であるにもかかわらず、「他人の子」(252) と誤解して余計にそういう乱暴な態度がとれた。本当は自分の孫に当る子供を、知らずに手荒く扱って、結局殺してしまったのである。ここで作者は、Robert の残酷さと同時に、彼の愚かさをも示していると言える。<sup>12</sup>

Robert と同様に「小さい Owen」の祖父に当る Ellis が、Owen に向って憤って言うように、「自分の父親に自分の本当の息子を殺させる」(263) ような反自然な出来事は、財産の絡む地主階級の間でしか起こらないことである。

Robert 的価値観はこのように随所で作者に批判されているが、但し、それはこの価値観が“The Doom”に於ては地主 Robert の価値観として示されているからである。Robert の価値観の或る意味では後継者である *Wives and Daughters* の Roger は、先にも見たように、決して地主になることはなく、「学問でパンを稼ぐ」博物学者になる。ここには、新しい価値観の持ち主が地主である限りは認められないが、地主になる以外の方向に生きる道を求める時、それは真に新しい価値観として肯定できるもの（たとえば合理的思考や、個人の幸福を追求する個人主義など）を含んでいるとする、作者の姿勢が認められる。

それと同じことが、古い価値観の持ち主である“The Doom”の Owen についても言える。Owen の価値観は地主になることを前提にしている限り Robert の価値観に勝ち目は無く、その将来性も無い。彼は父の Robert によって地主の後継者になることを妨げられ、結局彼の代で、Robert 的価値観によって9代も続いて来た地主 Griffiths 家を消滅させてしまう。

しかしその代りに、地主失格者の Owen は、Lady Ludlow や Osborne 同様に、没落しない地主に要求される非人間的で苛酷なことは一切やらなくても済むのである。Mrs. Griffiths のように卑劣な策略を弄する必要もない。作者は Owen のそういう側面を、彼を若い世代に設定することで、肯定的に描こうとしている。つまり Owen は地主としては先が無いが、もし地主以外の方向に生きる道を見い出せるなら、若い Owen には将来性があるということである。

従って Owen にとっての不幸は、彼もまた Bodowen の財産に執着していつまでもこの地所を離れられなかったところにある。彼は自分が父親を殺害するという予言があるにもかかわらず、最後まで「地主の後継者」の立場を捨てなかった。確かに生まれた時から将来は地主になるはずであった Owen



Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に描かれた二つの地主像

が、その地所を放棄するのは難しいことである。またそれだけ、地主として「自分でパンを稼ぐ必要がなく」生きていくことの魅力が大きいとも言える。が、Owen がこのように Griffiths 家の財産にいつまでも執着したこともまた、悲劇の要因であった。作者はここでも、Owen が地主になることを追求している限りは彼に未来は無いと描いているのである。作者は、Owen の価値観の中でも、世襲制を前提にした封建時代の領主の特権意識を引き継いでいる側面は、はっきり批判している。

そして一方で、作者は若い Owen には別の生きる道があると示唆している。それは「Nest を連れてどこか遠くの地方へ行き、そこなら彼女の方は最初に生まれた子供のことを忘れられるかもしれないし、彼の方は彼自身の尽力で生計を立てられるかもしれない」(255) ような所で生きることである。その場所も「Liverpool」(266) と暗示されている。作中では、この計画が実現するという保証は与えられていない。しかし小説の最後は次のようになっている。

彼らは暫くはこの地方を去ることが絶対に必要になった。その嵐の海を彼らはまさにその夜骨折って進まねばならない。Ellis は少しも怖がってはいなかった——とにかく一週間前、一日前の Owen と一緒だったら、何も怖がることはなかっただろう。しかし興奮し、絶望し、無力で、運命に追われた Owen と一緒では、彼はどうすることができただろう。

彼らは波の荒い暗闇の中へ乗り出した。そして人々の目に二度と見られることは無かった。(269)

この結末は文字通り取れば、彼ら三人は嵐の海に遭難して死んでしまったと言っている。しかし作者は、三人は漁師 Ellis の漁船で出発したとも描いているのである。Ellis は現実的な思考ができ、「賢く、抜け目がなく、世知に長けた人物」(245) で、これまでも実際に、世俗的な問題に対して判断力と実行力の点で信頼の置ける人物として描かれてきた。彼が Robert 的な実際の思考のできる男であることは呪いについての彼の考え方に最もよく示されている。彼は Griffiths 家について、たとえ呪いがかけられているとしても、

彼らはいくまで地主の一族であって、Nest はそういう地主の館の奥方になるのだという現実的側面しか見ていない。地主の死に対してもはっきり事故であると断言していたのは先に見た通りである。しかも人物造型の点で、多分に後の *Sylvia's Lovers* (『シルヴィアの恋人たち』) (1863) に於ける Sylvia の父親 Daniel (彼も元漁師の農場主である) を髣髴させるこの漁師の Ellis が、そう簡単に船を遭難させてしまうとは思えない。

それに、この *Sylvia's Lovers* に於て、また “The Doom” の翌年に書かれた “The Manchester Marriage” (「マンチェスターの結婚」) (1858) に於て、海で遭難して死んだと思われていた人物が、何年も経って戻って来る事件が重要なモチーフとして使われていることを勘案しても、作者が “The Doom” の最後をこのようにしている事には含みがあると考えられる。つまり彼ら三人には、無事に Liverpool に着き、そこで「Owen 自身の尽力で生計を立てる」(255) 道が残されているということである。

勿論、「地主の後継者」としての Owen は死なねばならない。従ってこれは、Ellis が当初考えたような、

「一旦安全に Liverpool に隠れたら、誰もあなた方がどこに居るかわからないだろう。……あなたと Nest はいつか家に戻って来て、Bodowen の館を子供たちで一杯にするだろうし、私もそれを見るまで長生きしよう。」(267)

という方向とは180度異なる。文字通り「Owen 自身の尽力で生計を立てる」(255) 道である。それは Owen にとっても、Nest や Ellis にとっても厳しい道である(現に、*Wives and Daughters* では Osborne にはこの生き方が許されていない)。が、作者はこの厳しい道を、Owen に完全に閉しているとは思えない。

なお、事故によって不幸にも相手を死亡させてしまった時の近代社会での本来の責任の取り方については、上でも触れたように、作者は *A Dark Night's Work* で改めて考察している。

## お わ り に

“The Doom”には、このように、父子の対立というより、地主階級の人間の二つの価値観の衝突が描かれている。それは更に他の後期作品に於ては、没落する地主と没落しない地主との描き分けへとつながっていく問題である。

この中心テーマの他に、“The Doom”にはもう一つ核がある。それは地主の Robert が、Owen という実子が居るにもかかわらず、後妻の画策で彼女の連れ子を後継者にするかもしれないという問題である。作中で Robert は Owen に向って、「もしお前が私の息子と呼ばれたいなら (=私の後継者になるつもりなら)」、Nest と手を切れと要求している。これはつまり、Nest と別れなければ Griffiths 家の財産は Owen のものにはならず、Mrs. Griffiths の連れ子の Robert のものになるということである。

これは Owen に関しては、上で見たように、地主階級の人間たちの財産を巡る争いに於ては、一瞬も気を許すことができないということを示している。しかし Robert の側には、義父が再婚相手の連れ子に対してどういう感情を抱くことが可能であるかという問題がある。

作者は “The Doom” のあと、この問題を幾つもの作品で取り上げている。たとえば *My Lady Ludlow*, “The Manchester Marriage”, “The Half-Brothers”, *Sylvia’s Lovers* そして *Wives and Daughters* である。*My Lady Ludlow* と *Sylvia’s Lovers* ではこれが女性の立場にからめて描かれ、女性の登場人物が、自分のかつて愛した男性と別の女性との間にできた子供を、心からの愛情を持って育てるという筋が描かれる。他の三作品ではいずれも義父が妻の連れ子に対して抱く感情が問題にされている。

特に “The Half-Brothers” では義父 William Preston が妻の連れ子の Gregory をどう扱うかが中心テーマである。初め William は我が子の財産を幾らかでも浸蝕すると考えて Gregory につれなくするが、或る事件が切っ掛けで Gregory が死んでしまった時、初めて自分の行為を深く反省し、「Gregory が生きていたら、私は私の土地を半分彼に与えたのに」(347) と

嘆く。ここには、実子と継子に対する父親の感情が、財産問題とからめて考えられているのを認めることができる。

同じように“The Doom”でも、妻の連れ子 Robert への地主 Robert の愛情は、Griffiths 家の財産とからんで起伏すると言える。地主 Robert は、Griffiths 家の財産に強い占有感を持っており、財産を盾に自分の意思を押し通す。しかし自分の強引さへの一抔の疾しさ（「自分が息子を傷つけたという感情」(239)）と、自分の言いなりにならない Owen への焦燥感とを、Griffiths 家の財産を狙う、再婚した妻にうまく利用されて、Owen を疎んじ、彼への肉親としての愛情を蝕ませていく。そしてその反動が「少年 Robert への不思議な溺愛」(256) へと発展していくのである。決して最初に地主 Robert が、少年 Robert の中に、Owen 以上に愛する要素を見つけたというわけではない。

このように“The Doom”では、人間の愛情の裏に、財産への思わくが存在していることが直視されており、これもまた、続く後期作品で様々な角度から描かれることになる問題である。

[註]

1. “The Poor Clare”の初出は1856年のクリスマスだが、実際に執筆されたのは結末部分以外は1855年であったとされている (Sharps 249)。従って“The Doom”との間はもっと空いていると言える。
2. どちらの作品でも、責任は無いという結論になっている。
3. Ganz も、“The Doom”を超自然現象を扱った作品としつつ、「作者はそういう現象を“The Poor Clare”より更に進んで懐疑的に扱っている」(213) と分析し、「息子による父の殺害が……事故によるものだという事実自体、超自然な要素を弱めようとする Mrs. Gaskell の傾向を示す」(216) と指摘している。
4. Gaskell がこうした愛国者たちに好意的であったことは、たとえばイタリアの統一を志した Giuseppe Garibaldi (1807-82) に彼女が関心を持っていたこと、実際に *Garibaldi at Caprera* という本に序文を書いたことにも示されている (Uglow 535-36, *Further Letters* 231)。
5. この作品は「均整のとれた体つきの、力強い民族」(223) が、ヨーロッパ各地

で、謂れなく差別を受けていることについて作者が憤慨して述べているもので、この「呪われた」という語は、“The Doom”の先祖の卑劣な行為のために「呪われている一族」とはむしろ逆の意味である。

6. Shakespeare が「ひとたび黄金が目的となれば、たちまち父子骨肉の間も、背いて行くものと見える！」(*King Henry IV, Part II, IV. v.*) と言っているとおりである。

ちなみにこの“The Doom”は Shakespeare の作品との関わりが深く、冒頭の Owen Glendower の魔力についての説明 (cf. 229) では、*King Henry IV, Part I* の三幕一場のせりふが引用されている (Notes 450)。また Rhys ap Gryfydd の特徴は、兄を殺して権力の座に就く *Hamlet* の Claudius を思わせる。

7. Gaskell はこの物語は「[娘の] Marianne が赤ん坊の時に書き始められていた」(L 384) と言っている。Marianne は1834年9月生まれなので、1835-7年頃に書き始められたことになる。多くの批評家たちは、作者が結婚前も含めてウェールズに滞在したいつかの時点で聞いた話を元にしてしていると解釈しているが、筆者には、作者が「[1837年] 9月に3週間ウェールズに行っていた」(*Diaries* 63) 時にこの「呪われた家」の存在を聞いたのではないかと思う。作者はこの頃の日記で、子供を突然亡くすことの恐怖を度々書いていて、それは“The Doom”の Nest の嘆きに繋がるように思える。

またウェールズで聞いた話を元に物語を始めるという構成は、初期作品の “The Well of Pen Morfa” (1850) に似ているので、“The Doom”も確かに最初の構想はかなり早い（「Marianne が赤ん坊の時」）としても、“The Doom”全体の主張は、以下分析するように、明らかに後期作品のものである。

8. この引用文については註6参照。
9. この問題は、他の作品でも、父子の対立が実はその裏に財産問題が絡んでいるという形でしばしば描かれる。*Wives and Daughters* でも、地主 Hamley は長男 Osborne が金貸しから借金する時、父の死を見越した「死後支払証書」(233) を入れたのではないかと疑うことで、息子への怒りを募らせる。また Anthony Trollope は *Can You Forgive Her?* で、地主である祖父の Squire Vavasor は、相続人に予定されている孫が自分の死を待ち望んでいると考え、孫の方も祖父の死そのものを望んでいるわけではないが、祖父の財産を早く上手く投資したいと考えて、二人の仲が決定的に破綻してしまう様子を描いている。
10. 作中での Owen という名前の扱いは、8代目の Griffiths が金持の地主の Miss Owen という女性と結婚し、「妻のおかげで権利を与えられた地所」

(231) を引き継ぐことになっている。彼らの館が Bodowen と呼ばれているのも、元の持ち主が地主の Owen 家だったからである。このように作者は Owen という名前を苗字とファーストネームの両方に使うことで、Griffiths 家の中に Owen という名を自然な形で持ち込もうとしたとも言える。

11. 事故によって相手が死亡してしまった場合の、近代社会に於ける責任の取り方については *A Dark Night's Work* で取り上げられるが、そこではそういう事故を起こした Mr. Wilkins を作者は同情を込めて描いている。そして事件が発覚する前に Mr. Wilkins は病死し、法的にも社会的にも罰せられることがない。但し作者は、Mr. Wilkins は事故後 1 年位しか生きられず、それも精神的・肉体的苦痛の大きい 1 年であったとしている。
12. これは Thomas Hardy の短編小説 “An Imaginative Woman” の結末で、武器製造業者の William Marchmill が本当は自分の子供であるのに「他人の子」と誤解してその子を忌避する場面が描かれていることを想起させる。ここでも Hardy は、そういう形で武器商人の Marchmill を批判していると言えよう。

#### Works Cited

- Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Chapple, J.A.V. and Alan Shelston, eds. *Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2000.
- Chapple, J.A.V. and Anita Wilson, eds. *Private Voices: The Diaries of Elizabeth Gaskell and Sophia Holland*. Keele: Keele UP, 1996.
- Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*. New York: Twayne, 1969.
- Gaskell, Elizabeth. “An Accursed Race.” 1855. *My Lady Ludlow and Other Stories*. The World’s Classics Ser. Oxford UP, 1989.
- . “A Dark Night’s Work.” 1863. *A Dark Night’s Work and Other Stories*. The World’s Classics Ser. Oxford UP, 1992.
- . “The Doom of the Griffiths.” 1858. *My Lady Ludlow and Other Stories*. The World’s Classics Ser. Oxford UP, 1989.
- . “The Half-Brothers.” 1859. *My Lady Ludlow and Other Stories*. The World’s Classics Ser. Oxford UP, 1989.
- . “Lois the Witch.” 1859. *Cousin Phillis and Other Tales*. The World’s Classics Ser. Oxford UP, 1987.

Elizabeth Gaskell の短編小説 “The Doom of the Griffiths” に描かれた二つの地主像

- . *My Lady Ludlow*. 1858. *My Lady Ludlow and Other Stories*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1989.
- . *North and South*. 1854–55. *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol. 4. New York: AMS, 1972.
- . “The Poor Clare.” 1856. *My Lady Ludlow and Other Stories*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1989.
- . *Sylvia's Lovers*. 1863. *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol. 6. New York: AMS, 1972.
- . *Wives and Daughters*. 1864–65. *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol. 8. New York: AMS, 1972.
- Hardy, Thomas. “An Imaginative Woman.” 1888. *Life's Little Ironies*. 1894. *Collected Short Stories*, The New Wessex ed. London: Macmillan, 1988.
- Hopkins, A. B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. New York: Octagon Books, 1971.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works*. London: Linden, 1970.
- Trollope, Anthony. *Can You Forgive Her?* 1865. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1990.
- Ugnow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Wright, Edgar. Explanatory Notes. *My Lady Ludlow and Other Stories*. The World's Classics Ser. Oxford UP, 1989.
- 中野好夫他訳『シェイクスピア全集』4 史劇 I, 築摩書房, 1973.

## Two Types of Landlords Drawn in Elizabeth Gaskell's "The Doom of the Griffiths"

NAKAMURA, Shoko

The short story, "The Doom of the Griffiths" was written by Elizabeth Gaskell in 1857, more than one year after her former fictional creation, "The Poor Clare". The story presents a conflict between two types of landlords; a landlord who may prosper and one who may not. This is the author's first treatment of an issue that becomes a major theme in her later works.

"The Doom of the Griffiths" is a tale about the fall of the Griffiths family, people of the landlord class. At the beginning of the story is an explanation of why the Griffiths were doomed to fall. When Owen Glendower, a Welsh hero in the Middle Ages, rebelled against Henry IV, an ancestor of the Griffiths named Rhys ap Gryfydd betrayed Owen, who believed in him. It means that Rhys ap Gryfydd was shrewd, and that he tried to side with those most likely to be victorious. In great anger, Owen, who was said to be able to use magic, cursed the traitor and his descendants. As a result, members of the Griffiths family were doomed by Owen to fail and disappear after nine generations. Owen prophesied that at that time a son should slay his father, the ninth Griffiths.

After this brief explanation the main plot begins. Two generations are described; the ninth named Robert Griffiths and his son, Owen Griffiths. They are father and son, but are quite different in manners. Robert is the second son and inherits the estate of the Griffiths as a result of his elder brother's death. He is gifted and able to create his own future. On the other hand, Owen is the only son who is an heir to the estate from the moment of his birth. He has no choice but to succeed his father. Therefore, he is passive and does not try to take a step forward, even though he becomes under the necessity of earning a living.

Their attitudes toward marriage also differ. The father gets married to a rich attorney's daughter after he inherited his family's estate. And after his first



wife, who is Owen's mother, died, he marries again a beautiful young widow with a little boy named Robert, who, coincidentally, has his stepfather's name.

The son, on the other hand, secretly gets married to the beautiful daughter of a man who works as a half farmer and half fisherman. The girl's name is Nest. They have a baby named Owen. Because the young couple cannot make a living, the wife and their baby live with her father in his cottage. Owen frequently and surreptitiously comes to the house from his father's manor house. The wife's father, who is a tenant of the Griffiths estate, endures this irregular situation, believing that his daughter will be Lady Griffiths in the future.

Robert's new wife schemes to drive Owen out of the mansion and make her child Robert inherit the family's estate. As a result of her scheming, her husband becomes estranged from his son and begins to favor his stepson. One day she tries to irreparably break the relationship between Robert and his biological son to make sure of her biological son's inheritance, and she exposes Owen's secret marriage to her husband, lying and insinuating that Nest is a prostitute. The angry father goes to his son's secret home to require him to separate from his wife, and snatches the little Owen from Owen's arms to throw the baby back at Nest. As a result, the baby falls to the floor and dies.

At last, Owen decides to leave his father's mansion for ever to live with his wife in a big city, earning his bread. It is, however, too late. After some troubles, the father moves into action. He and his son are placed in a situation in which they struggle on the edge of a precipice. A push of the son to escape from the father's grip causes the father to fall off the cliff, to hit his head against the edge of a boat, and to die.

Though it seems that this is a fulfillment of the prophecy, the author denies the supernatural element, emphasizing that the father's death is accidental. As a squire, Robert, a person who is shrewd and selfish like his ancestor Rhys ap Gryfydd, prospers, but he is also very cruel, while Owen, a passive liberal, is disqualified as a landlord. Through the story, the author is critical of the father.

The last of the story deals with Owen, his wife, and her father, who should leave the country before the dead body of the squire is found. They venture out on a stormy sea to disappear into the night. The author partly suggests that the three are shipwrecked and die. She, however, leaves room for another interpretation. The three might safely arrive in Liverpool, where Owen could “gain a

livelihood by his own exertions.” The author accepts Owen’s way of living when he leaves the status of a landlord. That is the reason that Owen is the younger of the two central characters.

It is important that the name of the second son Roger in *Wives and Daughters*, who is Robert’s successor, has the initial “R”, and that of the elder son Osborne in the same novel, who is Owen’s successor, has also the initial “O”. It means that “The Doom of the Griffiths” developed into *Wives and Daughters*.